

2022年
7・8月号

赤レンガ通信

特集：北海道サイクリング

JET スポットライト：Queen Xu



www.pref.hokkaido.lg.jp

今号では、2021年8月から2022年8月までの1年間、北海道庁国際課で勤務したマックスウェル・スティバート・ホークスが、春の喜びと自転車で見つけたささやかな幸せについて語ります。

春のサイクル



▲ 松前城 城外

日本中どこを探しても北海道ほど春の訪れを心待ちにしている場所はないでしょう。春の訪れのシンボル、桜の開花は、南の府県をピンク色に染めてからほぼ丸一か月遅れてやっと最北の北海道に到着します。東京都民が3月の末に桜の満開を楽しんでいる頃、北海道民は凍った道をソロソロ歩き、家では炬燵に温かいお茶で体を温める日々を過ごしています。桜の開花がエイの形をしたこの島、北海道に到来し、北上しながら島の隅々まで染め上げるのは4月下旬になってからのことです。

桜の波が北海道にやってくるのは、大抵4月29日の昭和の日から始まるゴールデンウィークの時期と重なります。北海道民にとっては、満開の桜を十分に満喫する季節であり、南の地方から再度桜の絶景を楽しもうと来訪する観光客を迎える季節でもあります。この桜の波は「桜前線」と呼ばれていますが、私は今年、この前線を自転車で追いかける旅に出かけました。北海道の南端から私が暮らす札幌まで、ペタル（花びら）に沿ってペダルを漕ぐ旅です。この春の到来を楽しむのに、花爛漫のサイクリング以上に良い方法はあるでしょうか？楽々と楽しい旅になるでしょう！木から散る花びらのようにスイスイと風にのって・・・少なくともそう期待して出かけました。続きもお楽しみください！

All issues of The Red Brick Bulletin can be accessed at https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/akarenga_eng.html

Published by the International Affairs Division, Department of Policy Planning and Coordination, Hokkaido Government (Edited by Maxwell Stibbard Hawkes)
ADDRESS: N3W6 Chuo-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan 060-8688 PHONE: +81(0)11-231-4111 FAX: +81 (0)11-231-4303

1 日目: 白神岬→瀬棚

旅は北海道の最南端、白神岬からスタートしました。ここからは、海の向こう20キロ未満の距離に位置する本州をはっきりと見ることができます。いかにも北海道の「入口」という感じがして、この島を北上する冒険のスタートの地にピッタリです。白神岬から松前城までは10キロもありません。松前城は北海道では唯一の江戸時代の伝統的なお城で、250種ほど、1万本以上の桜に囲まれています。



▲ 北海道の最南端、白神岬

あっという間に散ってしまうことで知られる桜ですが、これだけの品種があると長く楽しむことができます。それぞれの品種が次々に咲いては散り、何層にもなったピンク色の濃淡には目を奪われます。

お城に着いてから、ここから160キロのペダルの旅があることなど一旦忘れて、たっぷり1時間は花見を楽しみ、お祭り屋台の食べ物を試したりしながら過ごしました。松前を発つ頃には、午後



▲ 見事な満開の桜



▲ 桜の後ろに隠れている松前城

2時をまわっていて、太陽が（まだ天高く照っていましたが）海に向かって足早に動き始めていました。

北海道の南西の海岸沿いを走る国道228号線で松前を出ましたが、景色がイングランド南西の海岸部、特にコーンウォールの田舎に本当にそっくりだと思いました。とぎれとぎれの海、ごつごつした岩、起伏が続く丘陵、のどかな港町、人里離れた入江、数えきれない風力タービンと豊富な風。本当にそっくりです。

北に向かう、うねうねした道で何キロもの間突風に吹かれました。強風の中、移り変わるこの不思議なほどコーンウォールにそっくりな絶景が、よりありがたく思えました。潮風に混ざる桜の甘く

酔わせるような芳香がなかったら、イングランドの景色と殆ど見分けが付きません。（コーンウォール語とは似ても似つかぬ道路標識は別として）海岸沿いの景色は乙部町まで続きました。ちょうど日が沈む頃、私は森へと続く道に入りました。熊に出くわすことがありませんように、と祈りながらだんだん暗くなる森を走り、ちょうど太陽が海に触れる頃、安全に森を抜けることができました。熊の晩ご飯にならなかった安堵感と、完全に日が沈んだ中でこの先まだ75キロの道のりを走ることを理解する冷静さがないまぜになったような気持ちでした。

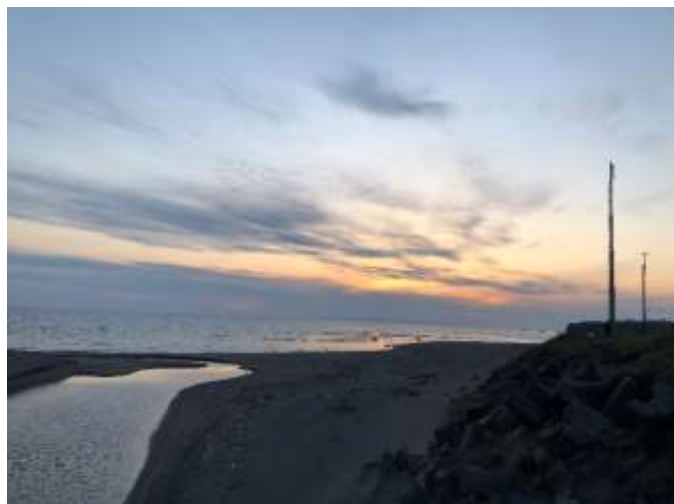


▲ 小砂子漁港

それからのその日は（というか夜は）一言で言い表すことができます。「暗い」。これ以上のことは書けません。他にこれと言って記憶に残ることもありませんでしたから。お尻が痛い。覚えているのはこれくらいです。お腹が空いてもいました。でも、目に映る景色は舗装道路がフロントライトに照らされてとぎれとぎれに見える程度になっています。星は綺麗でしたけれども。

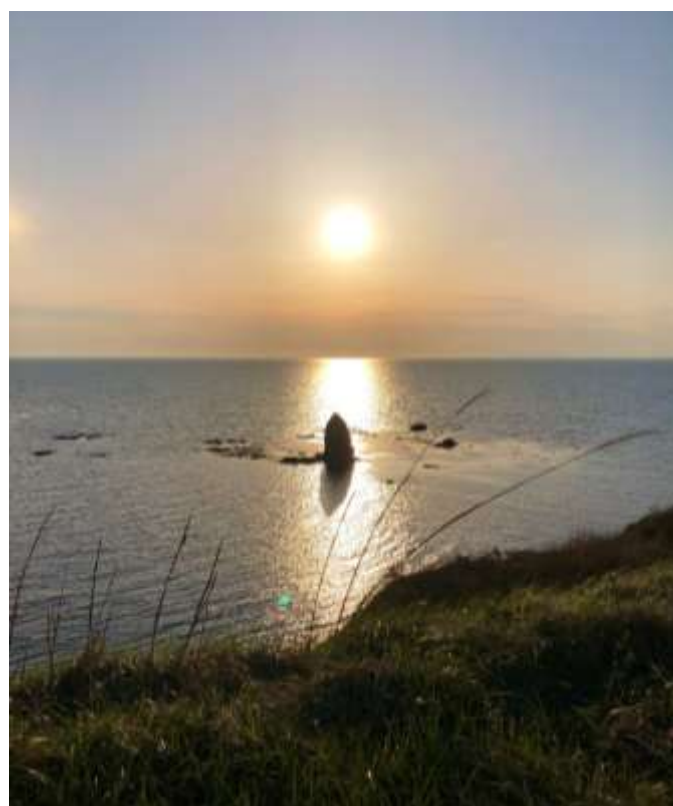
ついに、丘の上のキャンプ場に停車しました（うっかり通り過ぎて10キロ余計に走るようになってしまいました）。着いた頃には午後10:30になっていました。ここまで車で移動し、テントを張ってしてくれた私の旅の友は、確実に苛立っていました。私はこれ以上速く自転車をこぐことはでき

なかったと抗議しましたが、彼女は私が松前の桜の下であんなに長いこと浮かれたのがいけなかったと言います。これ以上反論できなかったので、



▲ あかりが消えていきます。

諦めて、バーベキューにした「フルーツポーク」ときのこをお腹に詰め込んで（優しくも彼女が焼いていてくれたのです）、テント（これも彼女が立ててくれました）に潜り込み、眠りにつきました。



▲ 海に落ちる陽

その夜私は、踊る桜、うねる海、螺旋になる風力タービン、フルーツポークの謎（のちにこれはポークの木になるポークの実ではなく、フルーツをふんだんに与えられた豚の肉だとわかりました。）の夢を見ました。もうペダルは漕いでいませんでしたが、私の心はまだグルグルと回っていました。180 キロの海岸線が、眠りに落ちる私の頭によみがえりました。それは、理論上、私の旅の最も長く最もつらい1日でした。明日はもっと楽でありますように、と心から願いました。



▲ 風力タービン



▲ 楽し気なしましまの灯台



▲ 故砂子からの景色



▲ 道路沿いの桜

2日目: 瀬棚 → 黒松内

2日目はちょっと嫌な予兆から始まりました。テントが私たちを食べようとたくらんでいたのです。風力タービンに囲まれた丘の上にテントを立てるということは、、風にかかれる可能性があるということ。それにしても何という風でしょう。その日の早朝、テントは「3次元では一つ次元が多すぎる」と勝手に結論づけて、私たちが中にいるというのに自らを折りたたんでしまうことにしたのです。私たちはポリエステルのサルコファガス（古代エジプトの石棺）からやっとのことで抜け出して、危なく寝袋の中でミイラになるのを逃れることができました。



▲ 悲しくもぺしゃんこのテント

朝の強風で起こされて良かったことは、前日より格段に早く旅路に着くことができたことです。



▲ 思い悩むような空と海沿いの道

ほとんど人気のないキャンプ場には気を散らすようなものも殆どなく、人食いテントによって朝寝坊の可能性も除外されたので、10時前には出発することができました。夜型人間の私が疲れ切っていたのですから、ちょっとした奇跡です。

2日目は、たった80キロの旅。前日の半分以下の距離です。それに、道はほぼまっすぐ続くはずでした。しかし残念ながら、その道は多くの地点でまっすぐに「上る」道で、比較的短い距離ながら、その中には1,500メートルもの上り坂が詰め込まれていたのです。主に海岸沿いの道だったので、私は無邪気に「きっと海面の高さの道が殆どで、上り坂は殆どない」と思っていたのです。黒松内のキャンプ場までの道のりで、たくさんの山や丘を越えてわが身を運んできた私には、それが間違いだったとわかっていました。



▲ 海へ続く溪流

瀬棚から黒松内までの景色は魅力的でしたが（もの思わし気で、どんよりした感じで）、前日の疲労で、今日の旅の終わりには景色を楽しむよりも温泉に行きたいという気持ちが強くなっていました。

All issues of The Red Brick Bulletin can be accessed at https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tsk/akarenga_eng.html

Published by the International Affairs Division, Department of Policy Planning and Coordination, Hokkaido Government (Edited by Maxwell Stibbard Hawkes)
ADDRESS: N3W6 Chuo-ku, Sapporo, Hokkaido, Japan 060-8688 PHONE: +81(0)11-231-4111 FAX: +81 (0)11-231-4303

ありがたいことに、温泉は期待どおりでした。早朝く出発し、比較的短距離の移動だったので、ゆっくりとアルカリ性の湯で疲れた体を休める時間がありました。2時間も湯につかり、しっかり休息し、梅干しよりもシワシワになりました。

その日の夕食は、様々なコンビニ弁当でした。キャノピーで雨を逃れ、焚火の前にしゃがみこんで食べました。それは「グランピング」ではありませんでしたが、少なくとも贅沢な食事と暖かさ、雨をしのご屋根はありました。

・・・大なり小なり。



▲ その夜のシェルター

薪（「スウェーデントーチ」と書いてありました）は気を付けていないと燃え続けることを拒否し、食事の間ずっと、火が消えてしまわないようにしょっちゅう息を吹きかけないといけませんでした。火を保つために使ったエネルギーは、火が提供してくれる熱量を確実に上回っていたと思いますが、

絶えずフーフーと頑張っていたおかげで私たちは体温を保つことができました。（私にさらなる肉体労働は必要なかったのですけれど・・・）



▲ 黒松内のキャンプ場に残る雪

最終的に、火は諦めて寝ることにしました。2日間自転車に乗り、長湯をし、愛情こもったコンビニの夕食を頂いた私には、すぐに疲労が襲ってきて、焚火のようにほんの数秒で「落ちて」しまいました。私たちが消そうとするやいなや、自ら消えてしまったあの焚火にそっくりでした。



2日が過ぎ、残るは1日。旅の終わりが足早に迫っていました。

▲ 非協力的な「スウェーデントーチ」



▲ 旅路にあった面白い形の岩の一例



▲ 黒松内付近の景色

3日目: 黒松内→札幌

翌朝起きたとき、私の体はカチコチでした。回復モードに入れなかった体を無理やり起こすか、完全に電池切れになるかのどちらかです。前者にできますように、と祈りました。家に着くまでには、まだ150キロの山道があります。ガス欠寸前の状態で走れる日ではありません。



▲ キャンプ場でのポリッジ

嬉しいことに、午前中いっぱい凍ったペンギンのようにキャンプ場をよちよち歩きでうろうろ過ごすことはなく、自転車にのってペダルを踏むと体が緩んできました。疲労は残っていましたが、前日浸かった温泉が、手足の痛みを和らげる助けになったようです。少なくとも前日の朝よりはずいぶん元気でした。風につぶされたテントに起こされたわけではなかったのも良かったのでしょう。雨もかなり弱まっていて、天は青空とそれを横切る趣ある真っ白な雲と深い灰色の雲で装飾されていました。



▲ 牧草ロールの鬼滅の刃

この2日間、私が子供のころ慣れ親しんだ景色に似た海岸線の風景が続きましたが、最終日は景色も大きく違っていました。それまで人里離れた浜辺や港を見ながら走ってきましたが、この日は森や畑をヒューッと通り抜けて走りました。潮の香りが農業の匂いに変わります。耕した土の匂い、緑の香り、そして生の肥料の強いにおい。



▲ 地面を突き破る新しい命

旅の始まりがイングランド南部を思い出させるものだったとすると、最終日は丘や牧草地、松林の多い北部を思わせませす。コーンウォールの海岸沿いの雰囲気は薄らいで、カンブリアの田舎の感じですか。天気さえもイングランド北部の雰囲気を醸し出しています。空は絶え間なく様相を変え、常に雨の恐れがありました。

この「恐れ」は私が羊蹄山の麓に来るまで踏みとどまってくれていましたが、そこでついに天が開

き、聖書にでもありそうなスコールの中、私はペダルを漕いでいました。いや、パドルを漕いでいたのかもしれませんが。私のレインジャケットは立派に持ちこたえましたが、ジャケットに覆われていない部分は数秒ですぐ濡れになりました。全くウォータープルーフではない靴と手袋（それまでは薄いながらも山の冷たい風から私を守ってくれていました）は完全に使い物にならなくなり、私の体温を保つどころか、今ではびしょ濡れになった生地がどんどん奪っていきます。

手足の感覚を保つためにはもう1枚何か必要だと思い、近くのコンビニで50組のポリエチレン手袋と、お菓子をたっぷり買いました。2つしか手がない私が、3日間の旅の最終日に100枚の手袋は必要なかったのですが、私が寄ったコンビニにはそれ以外の選択肢がありませんでした。手袋を1枚ずつ手足に着けて、残りの96枚はバイクバッグにしまいました。そして大福を口に押し込んで、恐るべき中山峠へと漕ぎだしました。

薄っぺらで使い捨てにもかかわらず、手袋は見事な働きをしてくれました。手足は依然びしょ濡れではありましたが、少なくとも風は遮られています。薄いポリエチレンの層が風に対して効果的なバリアになっていました。ポリエチレンは通気性が悪いので、汗をかき始めるとウールの手袋と靴下は前よりもビショビショになり、私の手足は雨と汗が混ざったぬるいスープの中で泳ぎ始めました。あまり感じの良い表現ではないと思いますが、身を切るような風に耐えるのに比べたら、はるかに好ましい状況でした。山道を登るにつれて気温も下がってきていたので、暖かいものであればどんなものでも嬉しかったのです。

山道を半分くらい登ったところで雨がやみました。というか、降るものが雨であることをやめたのです。代わりに雹がザーッと降ってきて、エアガンのように体を打ち、バラバラと道路にまき散らされます。北海道の春を味わう目的で始めた旅だというのに、これはあまり春っぽくありませんが、

間違いなく私は北海道をたっぷり味わっていました。5月に雹の嵐に打たれるなんて、他に経験できるところは日本には殆どありません。

上れば上るほど雹は激しくなりました。頂上近くで黒の四輪駆動に乗った男性が車を停めて飛び降り、私に乗らないかと言ってくれました。私は彼と話した10秒ほどの間、できる限りのお礼を述べ、「もう少しで着くから大丈夫です」と説明しました。でも、どこに着くのかはよくわかっていませんでした。札幌にはまだ50キロほどありました。でも山のここまで何とか身を引くようにやって来たのだから、あと少しで到着する頂上まで自分で到達したかったのです。

男性の申し出を頑なに辞退はしましたが、私は車を停めてくれた人がいたということに、ものすごく感動していました。相当哀れな姿だったのでしょう。雹が降る中、一人で、文明から遠く離れた山道を必死で上っていたのですから。

ついに私は道のとっぺんにたどり着きました。そこにはひとひらの春もありませんでした。道路以外の場所は雪に深く覆われ、重い錫色の空からは雹が地面を打ち続けています。周囲を見回すと、ほんの数日前、明るい陽光の中桜の下でのんびりしていたなんて信じられないような気持ちでした。

頂上で感じられた唯一の暖かさの兆候は、道沿のカフェから漏れる優しい灯りでした。暖かいコーヒーとケーキを確実にいただけることが保証されています。抗いがたい誘惑でしたが、日は弱まり、天気は一向に良くなりそうにありません。家路を急ぐことに決めました。雹の嵐の中で山を下るのは暗くなっていなくても十分厳しいでしょう。ケーキは待ってくれても、太陽は待ってくれません。下山は、土星の環を泳ぐような感じでした。もしくは、世界最大のスイカの種飛ばし大会に参加するような感じでしょうか・・・「的」として。どちらも経験がないので、うまく例えられる立場にありませんが、とにかく沢山の雹にものすごいスピ

ードで打ち付けられた、ということです。



▲ 中山峠

幸い事故もなく山を下りることができました。定山溪の温泉街に自転車を停めた頃、空が晴れてきました。そこからはリラックスして果樹園や林を通り抜け、その先に街の灯りが見えてきました。市街地の交通を無事通り抜け、午後7時過ぎ、ついに家に到着しました。出発してから400キロ、3日後の到着です。旅の友は家で私たち（主に私）のドーナツを持って待っていてくれました。素敵な雪まみれの自転車旅が、素敵に終わりました。

出発したときの主な目的は北海道をできる限り「経験」することでした。有名観光地だけでなく、その間にある全ての空間をも経験したかったのです。この3日間、晴天の桧山の海岸線から、胆振の終わることのない冬の山々までの全てを体験しました。その途中では桜を浴び、温泉に浸かり、天気は日光、雹、スコール、強風を経験し、日に焼け、凍え、びしょ濡れになり、自転車から吹き飛ばされそうにもなりました。設定した目標を達

成するという意味では、この旅は完全な成功でした。



▲ 定山溪からの家路



▲ ニセコ狩太神社。嵐の前の静けさ。



▲ 定山溪の鯉のぼり



▲ ホーム・スウィート・ホーム



▲ 旅の後のドーナツとキュンちゃん



北海道 JET スポットライト



北海道に暮らす、JET（外国青年招致事業、The Japan Exchange and Teaching Programme）参加者は約300人。世界中から集まった私たちは、それぞれこの島でその人ならではの経験をしています。誰にも物語があります。どんな方がいるでしょう？聞いてみましょう！



QUEENA XU さん

今号では、イラストが得意で、自転車、スキー、ハイキングが大好きな Queena Xu さんをご紹介します。絵になる町、剣淵町に暮らす、5年目のALTです。



自己紹介をお願いします！

Queena といいます。カリフォルニア生まれで、子供時代は中国で過ごしましたが、アメリカに戻り教育を受けました。大学を卒業し、オフィスワークをしていましたが、自分が何をしたいのかまだわかっていませんでした。だから、冒険を探している人なら誰でもするように、私も荷物をまとめて日本へやってきたのです。

日本で暮らして4年ほどになります。私が住んでいる町は剣淵町といって、4,000冊以上の絵本を収蔵する「絵本の館」で有名です。

芸術（絵を描くこと、特にガッシュという不透明水彩）からアウトドア（夏はハイキング、サイクリング、ランニング、冬はスキー）まで、さらにはマインドフルネス（ジャーナリング、ヨガ、料理）など、色々な趣味があります。でも、どれも華々しく活躍している、というものはありません。新しい挑戦や経験を探すのが楽しいんです。

どうして日本／北海道に来たのですか？

アニメオタクで、ポケモン、デジモン、遊戯王、セーラームーンなんかを見すぎというほど見て育ちました。漫画を読んだり好きなキャラクターの絵を描いたり、時には自分のキャラクターを作り出したりするのが大好きでした。日本に対する興味は大きくなって、私の人生に大きな影響を与えるようになりました。大学卒業後、友人数人と日本に遊びに来ました。夢がかなったんです。それで日本が大好きになっ

て、同じ年に今度は母と姉と一緒にまた日本に来ました。その時、自分は日本に住んで働きたいと思ったんです。

これまでの JET 経験はどうでしたか？

日本での生活を本当に楽しんでいます。最初は田舎暮らしには慣れられないんじゃないかと思いましたが、今では都会に住むことが想像できません！このシンプルで落ち着いた小さな町での暮らしが大好きです。生徒たちとの交流もとても楽しいです。幼稚園から高校まで、町内の全ての学校で教えているので、子供たちが成長する姿を見られるという素晴らしい経験をしています。



▲ 剣淵の絵本の館

最も記憶に残る瞬間は？

北海道での生活には、たくさんの素晴らしい瞬間がありました。でも、最も記憶に残るのは、この町の人たちが見せてくれた小さな親切です。例えば、ご近所さんが1年目の夏祭りに着ていく浴衣を貸してくれたことや、小学生たちが手を引いて鬼ごっこに誘ってくれたこと、町の太鼓のグループに入って太鼓ファミリーの一員になれたこと、生徒たちから時々もらう手紙など、他にもたくさんあります。こういう小さな瞬間の積み重ねが、私に大きな感銘を与えるのです。

地域で一番のお気に入りは何ですか？

上川で暮らすと、たくさんの特典が付いてくるんです。私が住んでいる場所は自然あふれる田園に囲まれています。市街地からもそう遠くありません。旭川までは車で1時間です。ここに来るまでコンクリートジャングルでしか暮らしたことがなかったので、自然に囲まれるというのがこの地域での生活で一番好きなお気に入りです。スキー、サイクリング、ハイキングなどのアウトドアの趣味は北海道に来てから新しく始めました。ここの自然は1年を通して美しいです。春の桜、夏祭り、紅葉、パウダースキーなど、どの季節にもお楽しみがあります。ここで暮らすことに飽きることはないと思います。上川の贅沢な自然でいつでもリフレッシュできますから。

